文学大系『平家物語』(前項参照)。
［5］『天草版平家物語語彙用例総索引』　近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ　編、勉誠出版刊行、1999年。
［6］天草版『平家物語』大英図書館蔵。文献［5］の第1冊〈影印・翻字篇〉による。
［7］東京大学文学部国語研究室蔵『平家物語』(高野辰之旧蔵)。新日本古典文学大系『平家物語』による。文献［3］の説明を参照。
［8］慶応義塾大学付属斯道文庫蔵『平家物語』　影印の『百二十句本平家物語』(汲古書院刊行、1970年）による。
［9］駒沢大学付属図書館沼沢文庫蔵『平家物語』(沼T29、古写本)。原本調査および写真による。
［10］新日本古典文学大系『平家物語』　文献［3］の説明を参照。
［11］『平家物語の文体論的研究』西田直敏著、明治書院刊行、1978年。

注　記

〈注１〉『天草版平家物語語彙用例総索引』第４冊の解説Ⅱ（濱千代いづみ・近藤政美執筆）の＜表５＞は、集計にあたって「る・らる・す・さす・しむ」を意味によって細分した。

〈注２〉日本古典文学大系『平家物語』上（[文献１]参照）の補注（巻一）の八（てんげり）の項の説明を参照。

〈注３〉「基本語彙・基礎語彙」真田信治　岩波講座『日本語』９〔語彙と意味〕所収、岩波書店刊行、1977年。諸先学の使用法をまとめたものである。執筆者の定義・見解ではない。

〈注４〉「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」大野晋　『国語学』87集、1971年。この論文はその後の語彙研究に多くの示唆を与えた。

〈注５〉『源氏物語語彙用例総索引』（付属語篇）（上田英代ほか　編、勉誠社刊行、1996年）による。ただし、「やうなり」は付録の一覧に見当たらない。「やう／なり」と区切ったためである。

〈注６〉『天草版平家物語語彙用例総索引』第１冊の解説Ⅰ（近藤政美　執筆）参照。

〈注７〉天草版『伊曽保物語』の「き」「つ」「べし」の例

1	ゲレゴの言葉よりラテンに翻訳せられしものなり.	409-5
2	あるほどの串柿は皆汝に与へつ.	72-23
3	また世にあるべうも覚えぬと自慢し：	462-16

文　献

[１]『平家物語総索引』金田一春彦・清水功・近藤政美　編、学習研究社刊行、1973年。本文は日本古典文学大系『平家物語』（高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦　校注、岩波書店刊行、上-1959年、下-1960年）。

[２]『天草版平家物語総索引』近藤政美・伊藤一重・池村奈代美　編、勉誠社刊行、1982年。本文は勉誠社文庫『天草版平家物語』（大英図書館蔵本の影印、勉誠社刊行、上-1977年、下-1979年）。

[3]『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）　近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子　編、勉誠社刊行、1996年。本文は新日本古典文学大系『平家物語』（梶原正昭・山下宏明　校注、岩波書店刊行、上-1991年、下-1993年）。

[４]『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）　近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子　編、勉誠社刊行、1998年。本文は新日本古典

が京都語の話し言葉の中ではすっかり衰退していたことが大きな要因になったと言えよう。

七　むすび

本稿では、室町時代末期の口語体を基調とする天草版『平家物語』の助動詞について、文語体を基調とする『平家物語』〈高野本〉と比較しながら計量的な方面から調査・集計を進めた。最初に助動詞の語彙の全体像を明らかにした。次に各語の使用度数順の語彙表を作成し、基幹語彙を設定した。第一基幹語彙は助動詞全体の使用度数に対して50.00‰以上、第二基幹語彙は5.00‰以上である。これは次に論じることを予定している助詞にも適用できる基準である。

〈天草版〉の基幹語彙は第一・第二を合せて16語で、累積使用度数の比率は973.36‰である。助動詞の受け持つ大部分の意味領域は、これらによって表現できる。〈高野本〉についても、これが21語、980.13‰で同様のことが言える。

〈天草版〉の基幹語彙のうち〈高野本〉でも基幹語彙に入っている語は＜る・らる・す・さす＞など９語である。これらは対応する文を比較した場合、同じ語の使用されていることが他より多い。この傾向は巻四～巻七などで本文が原拠本に近い『平家物語』〈斯道本〉の場合、さらに顕著になる。これに対して、〈高野本〉で中位・低位・不使用の語も＜う・た・ぢや・なんだ＞など７語存する。これらは対応する文を比較すると、他の語が使用されていることが多い。また対応する文の存しないこともある。〈天草版〉の助動詞の代表とも言うべき「た」を例に取ると、〈高野本〉では「けり」との対応が多く、他に「き」「ぬ」などがある。鎌倉・室町時代にはこれらの語が話し言葉では衰退し、「た」がその役割を担うことになったからである。先の「なり（断定）」も同じ過程で「ぢや」がそれに代り出していることを示している。

〈天草版〉は当時の話し言葉（口語）の研究のためには最も重要な資料であると、第一節で述べた。＜る・らる・す・さす・た・う・らう＞などの基幹語彙16語で見る限り、京都語の話し言葉の基礎語彙であると言えよう。ところが、中位語・低位語の中には＜けり・き・ん・べし＞などのように文語体で用い、〈高野本〉で基幹語彙の中に入る語も存する。それには口語訳の原拠にした『平家物語』の影響があることなどによるためである。〈天草版〉の助動詞がすべて話し言葉の資料というわけではないことは、これによって明確になった。

〈斯〉御所中ノ女房タチアキレサワカレケリ。　291-2

このような例は他にも多数ある。要するに、原拠の『平家物語』の「けり」は〈天草版〉で「た」を使用して口語訳されることが多かったのである。過去・完了の助動詞「き」「つ」「ぬ」「り」「たり」も同様である。

（き→た）

8〈天〉（成親卿）・・・船に乗り，次の船二三十艘も漕ぎ続けてこそあったに，　55-2

〈高〉（成親卿）・・・舟に乗り、次の舟二三十艘漕つづけてこそありしに、上104-14

（つ→た）

9〈天〉父を諌められた言葉に従うて，わが身に勢の付くか，付かぬかのほどをも知り，52-6

〈高〉父をいさめ申されつる詞にしたがひ、我身に勢のつくかつかぬかの程をも知り、上 102-11

（ぬ→た）

10〈天〉（頼政）・・・、わが身も，子孫も滅びられたことは，まことにあさましい次第でござった.　143-15

〈斯〉（頼政）・・・、我身モ子孫モ滅ヒヌルコソアサマシケレ。　298-15

（り→た）

11〈天〉（維盛）・・・連銭葦毛な馬に金覆輪の鞍置いて乗られた。　147-24

〈斯〉（維盛）・・・連銭葦毛ナル馬ニ黄覆輪ノ鞍置テ乗玉へリ。　347-3

（たり→た）

12〈天〉熊谷これを見て汝は手を負うたか？　265-11

〈斯〉熊谷是ヲ見、汝ハ手負タルカ。　（会話）527-7

これらの語は文語文を基調にした『平家物語』でいずれも基幹語彙である。が、話し言葉では次第に勢力が衰え、代わって室町時代には「た」の勢力が増大する。そして、〈天草版〉における「た」は「たり」のみでなく「けり」「き」「つ」「ぬ」「り」の意味をも包括して〈高野本〉の「けり」を使用比率の上で凌ぐことになったのである。

『平家物語』は鎌倉時代に成立した作品である。平安時代末期の平氏一族の興亡を歴史の一こまとしてとらえ表現している。これを助動詞の使用度数という方面から見ると、源平の時代を回顧し、過去・完了の意味の「けり」以下の語を盛んに使用して戦闘の場面などを描いている。〈天草版〉に「た」の使用度数が格別に多いのは、このような『平家物語』を室町時代末期に話し言葉に訳したこと、この時代には「けり」以下の語

それでは<べし・つ・けり・き>などが〈天草版〉でなおかなり使用され、中位語の使用度数を有するのはなぜか。それは原拠にした文語体基調の『平家物語』の影が〈天草版〉に色濃く残存しているからである。

3 〈天〉さしも艶なりし人々の三が年の間の潮風に痩せ黒み, 349-12
〈斯〉サシモ艶ナリシ人々ノ三ケ年カ間塩風ニ痩黒、 673-4
4 〈天〉(有王が僧都の娘に) ありし様を始めより細々と語って申す。 92-4
〈高〉(有王が僧都の娘に) 有し様、始よりこまごまと申。 上167-13

これは当時文語体に使用されていた『平家物語』の基幹語彙であるから、理解することが日本語の学習に必要だと思い、〈天草版〉でも適宜使用したと考えられよう。因みに, 同じ目的で作成された天草版『伊曽保物語』を調査すると、「けり」の用例は存せず、他の語の用例もきわめて少ない。(注7) これは両者の受け持つ役割が違っていたからであろう。

〈天草版〉の内表紙や序文には、キリシタンの宣教師たちがこの書の編纂の目的として話し言葉の他に、日本の文化・風俗を包括した意味でのイストリヤをも学習することをあげている。彼らの最も大事なことは、日本人に「天の御法(みのり)」を伝えることであった。そのための日本語の学習であり、日本人を理解することであった。〈天草版〉では琵琶を弾いて語る平曲の詞章や多くの和歌がそのまま書写されている。

5 〈天〉浜名の橋をも過ぎければ, 池田の宿にぞ着き給ふ: 299-9
〈斯〉浜名ノ橋ヲモ過ケレハ、池田宿ニソ着玉フ。 584-10
6 〈天〉平家 (ひらや) なる棟守りいかに騒ぐらん ? 柱と頼む板(いた)を落として. 154-13
〈斯〉ヒラヤナルム子モリイカニ騒ラン、柱トタノム极(スケ)ヲ落シテ。 354-10

〈天草版〉の助動詞の代表は過去・完了の意味の「た」である。〈高野本〉では使用度数5 (0.25‰、いずれも会話文) の「た」が、なぜ〈天草版〉で2865 (252.69‰) になったのか。この問題に対しては、〈高野本〉の助動詞を代表する「けり」の使用度数4130 (205.16‰) が〈天草版〉で12 (1.06‰) になっていることに着目することが解決の糸口になろう。

(けり→た)
7 〈天〉御所中の女房たち呆れ騒がれた。 138-6

を注ぐように師（上長）から指示されている。このことから第三節の〔表Ⅱ〕で示し、第四節で説明した第一基幹語彙・第二基幹語彙を合わせた16語は、そのまま室町時代末期の京都語の話し言葉の基礎語彙（中枢部分として構造的に存する語）と解してよいであろう。

不干ハビヤンが天草版『平家物語』の本文を作成するために原拠として用いた『平家物語』については、多くの古写本・古刊本を比較すると、十二巻本系統のもので範囲により３種の本文が想定される。が、それらを厳密な意味で現存本の中から特定することはできない。原拠本に近い本文を有する古写本の名で示すと、次のようになる。〈注6〉

平家物語（十二巻本）の範囲		天草版『平家物語』の原拠本に近い諸本の例	天草版『平家物語』の原拠本との距離
A	巻一～三巻	＜竜大本＞＜高野本＞	かなり近い
B	巻四～七巻	＜斯道本＞ ＜小城本＞＜鍋島本＞	極めて近い かなり近い
C	巻　八	＜平松本＞＜竹柏園本＞	近い
D	巻九～巻十二	＜斯道本＞ ＜小城本＞＜鍋島本＞	極めて近い かなり近い

上表であげた『平家物語』諸本はいずれも文語体を基調にしている。ここで比較の対照にした〈高野本〉は巻一～巻三の本文が原拠本にかなり近い。が、他の巻についてはそれより近い本文を持つ諸本が存する。

〈高野本〉の〔表Ⅲ〕で示した第一基幹語彙の＜けり・き・む（ん）・べし＞、第二基幹語彙＜ぬ・り・らむ（らん）・つ・けむ（けん）・じ・ごとし＞は、〈天草版〉では中位語・低位語である。そして、これらは主として文語文で使用されていた助動詞である。室町時代末期の話し言葉では他の語を使用した表現が主流であった。

1 〈天〉（俊寛）・・・；今より後は何として聞かうぞと言うて，悶え，焦がれられた.
75-3

〈高〉（俊寛）・・・今より後、何としてかは聞くべき」とて、もだえこがれ給ひけり。
上143-3

2 〈天〉鹿さへもわれらに恐れて山深う入らうずるに，　270-22

〈斯〉鹿タニモ我等ニ恐テ山深コソ可ㇾ入ニ、　535-7

とii）＜す・さす・まじ・やうなり＞は『源氏物語』でも多く見られ、平安時代から盛んに使用されていたことが判明する。(注5)

また、（ロ）第二基幹語彙の中にはi）＜なり（断定）＞のように活用語形の変化する語もある。

○なり（断定）

	連用形 （なり・に・ん・で）	終止形 （なり・な）	連体形 （なる・な）	合計
〈高野本〉	70・590・5・163	593・0	112・0	1914
〈天草版〉	3・54・0・0	11・1	5・25	335

備考　表示以外の活用形の用例数は省略する。

○ぢや（断定）

	連用形 （で）	終止形 （ぢや）	連体形 （ぢや）	合計
〈高野本〉	0	0	0	0
〈天草版〉	518	176	53	747

備考　表示以外の活用形の用例数は省略する。

「なり（断定）」は〈高野本〉の連用形（なり・に）終止形（なり）連体形（なる）が〈天草版〉で激減し、それらに代わって「ぢや（断定）」の連用形（で）が増加し、終止形（ぢや）連体形（ぢや）が多数現れている。なお、〈高野本〉の連用形（で）と〈天草版〉の連用形（で）とは同じ語形であるが、終止形で整理したためこのようになった。

六　助動詞の基幹語彙と作品の性格との関係

天草版『平家物語』は第一節で述べたように、イエズス会の宣教師たちが日本の言葉とイストリヤを学ぶためのテキストとして編纂された。和漢混交で文語体の『平家物語』を話し言葉に訳し、問答体に構成しなおしている。したがってそれは口語体が基調になっている。また序によれば、編者の不干ハビヤンはテニハ(助詞・助動詞など)の使用に意

〈高野本〉で使用度数の特に多い語は「けり」である。度数4130、比率205.16‰は全体の五分の一を超える。〈高野本〉の助動詞を代表する語で、比率は多少低いが〈天草版〉の「た」に相当する。

第一基幹語彙は〔表Ⅲ〕の「けり」から「べし」までの8語である。第一基幹語彙の使用度数が特に多いのは、〈天草版〉と同様である。累積使用度数は15231で助動詞の全使用度数20131に対して756.59‰になる。が、〈天草版〉と同じ語は「ず」「たり」「る」の3語で、他の5語は異なる。そして、第二基幹語彙は「ぬ」から「まじ」までの13語である。これらを加えた累積使用度数は19731で、980.13‰に当る。〈天草版〉と共通するのは「す」「さす」「まじ」「やうなり」の4語である。また「らる」は〈天草版〉では第一基幹語彙に入っている。他の8語は〈天草版〉の基幹語彙の中に見られない。

中位語は「う」から「まほし」までの9語、低位語は「うず」から「まじかんなり」までの7語、そして「ぢや」から「ようず」までの10語は不使用である。

〈天草版〉の助動詞の基幹語彙が使用されている本文を、〈高野本〉の本文と比較対照してみると、次のようになる。

（イ）　第一基幹語彙

ⅰ）〈高〉でも第一基幹語彙、＜る・たり（完了）・ず＞：同語使用の比率が高い。

ⅱ）〈高〉では第二基幹語彙、＜らる＞　：上記に準ずる。

ⅲ）〈高〉では中位語　　＜う＞　　：他語使用の比率が高い。

ⅳ）〈高〉では低位語、　　＜うず・た＞：上記に準ずる。

ⅴ）〈高〉では不使用、　　＜ぢや＞：他語と対応、または口語訳の際に〈天〉で要約・添加の部分に使用。

（ロ）　第二基幹語彙

ⅰ）〈高〉では第一基幹語彙、＜なり（断定）＞：同語使用の比率が高い。

ⅱ）〈高〉では第二基幹語彙、＜す・さす・まじ・やうなり＞　：上記に準ずる。

ⅲ）〈高〉では中位語、　　＜ナシ＞

ⅳ）〈高〉では低位語、　　＜ナシ＞

ⅴ）〈高〉では不使用、　　＜らう・まい・なんだ＞：他語と対応、または口語訳の際に〈天〉で要約・添加の部分に使用。

（1）第一基幹語彙のうち〈高野本〉でも同語の使用されている比率の高いⅰ）＜る・たり（完了）・ず＞とⅱ）＜らる＞、および（ロ）第二基幹語彙のⅰ）＜なり（断定）＞

〔表Ⅲ〕　〈高野本〉の助動詞の使用度数表（〈天草版〉対照）

iii		ii			i		
番号	〈助動詞〉	〈天草版〉度数・比率			〈高野本〉度数・比率		
12	けり	●	12	1.06	●	4130	205.16
25	ず	●	703	62.00	●	2080	103.32
30	なり（断定）	●	335	29.55	●	1912	94.98
9	たり（完了）	●	955	84.23	●	1893	94.03
1	る	●	1385	122.16	●	1702	84.55
11	き	●	24	2.12	●	1300	64.58
13	む（ん）	●	7	0.62	●	1132	56.23
22	べし	●	51	4.50	●	1082	53.75
7	ぬ	●	17	1.50	●	782	38.85
2	らる	●	1504	132.65	●	774	38.45
3	す	●	514	45.33	●	762	37.85
4	さす	●	254	22.40	●	393	19.52
8	り	●	2	0.18	●	336	16.69
19	らむ（らん）	●	6	0.53	●	299	14.85
6	つ	●	49	4.32	●	244	12.12
23	けむ（けん）	●	4	0.35	●	220	10.93
15	むず（んず）	×	0	0.00	●	213	10.58
26	じ	●	12	1.06	●	137	6.81
34	ごとし	●	26	2.29	●	115	5.71
46	やうなり	●	129	11.38	●	114	5.66
27	まじ	●	89	7.85	●	111	5.51
14	う	●	670	59.09	●	80	3.97
38	てんげり	×	0	0.00	●	71	3.53
24	なり（伝推）	●	1	0.09	●	54	2.68
29	たり（断定）	●	6	0.53	●	50	2.48
42	ごとくなり	●	16	1.41	●	34	1.69
5	しむ	●	3	0.26	●	27	1.34
32	たし	●	27	2.38	●	20	0.99
18	まし	●	1	0.09	●	19	0.94
33	まほし	●	3	0.26	●	15	0.75
16	うず	●	589	51.95	●	8	0.40
39	たんなり	×	0	0.00	●	6	0.30
10	た	●	2865	252.69	●	5	0.25
21	めり	●	1	0.09	●	4	0.20
40	べかんなり	×	0	0.00	●	4	0.20
37	てんぎ	×	0	0.00	●	2	0.10
41	まじかんなり	×	0	0.00	●	1	0.05
31	ぢや	●	747	65.88	×	0	0.00
35	なんだ	●	151	13.32	×	0	0.00
28	まい	●	84	7.41	×	0	0.00
20	らう	●	62	5.47	×	0	0.00
44	さうなり	●	19	1.68	×	0	0.00
43	ごとくぢや	●	4	0.35	×	0	0.00
47	やうぢや	●	4	0.35	×	0	0.00
36	げな	●	3	0.26	×	0	0.00
45	さうぢや	●	3	0.26	×	0	0.00
17	ようず	●	1	0.09	×	0	0.00
使用度数合計			11338	1000.00		20131	1000.00
異なり語数合計			41語			37語	

語集団の骨格的部分集団。

（3）基礎語彙・・・特定言語の中に、その中枢的部分として構造的に存在する語の部分集団。

ここでは、「基幹語彙」を上記（ロ）の意味で用いる。

大野晋は平安時代の和文脈系文学作品を対象にして語彙の研究をした時、「基本語彙」という語を用い[注4]た。そして、使用率0.1‰を目安にしてそれ以上と定めた。又、西田直敏は『平家物語』の語彙の研究に「基幹語彙」という語を用いたが、その概念と基準は大野の「基本語彙」の考え方に従った[文献11]。これらはすべて自立語を対象にした研究である。ここでは付属語の助動詞を対象とするので、基準も別途に設定する必要がある。

本稿では各語の使用度数を比率によって先ず4段階に分類した。50.00‰以上の語集団を高位語（第一）〈第一基幹語彙〉、5.00‰以上の語集団を高位語（第二）〈第二基幹語彙〉、0.50‰以上の語集団を中位語、それ未満の語集団を低位語として設定した。そして、一作品に使用されていない語集団を不使用として示した。

（i）	高位語（第一）	50.00	≦	α		.	・・・	第一基幹語彙
（ii）	高位語（第二）	5.00	≦	α	＜	50.00	・・・	第二基幹語彙
（iii）	中位語	0.50	≦	α	＜	5.00		
（iv）	低位語	0.00	＜	α	＜	0.50		
（v）	不使用			$\alpha=0.00$				

備考　上記のαは各段階での使用比率を示す。単位はすべて‰である。

第一基幹語彙は〔表Ⅱ〕の「た」から「うず」までの8語である。これらの使用度数は特に多い。累積使用度数が9418で、助動詞の全使用度数に対して830.66‰になる。そして、第二基幹語彙は「す」から「らう」までの8語である。これらを加えると、累積使用度数は11036で、助動詞の全使用度数に対して973.36‰である。

両者を合せて〈天草版〉の助動詞の基幹語彙とする。

五　〈高野本〉の助動詞の使用度数との比較

〈高野本〉の助動詞の各語を使用度数の多い順に並べ、全助動詞に対する比率（単位：‰）を記すと次ののようになる。

7	ぬ	●	17	1.50	●	782	38.85
42	ごとくなり	●	16	1.41	●	34	1.69
12	けり	●	12	1.06	●	4130	205.16
26	じ	●	12	1.06	●	137	6.81
13	む（ん）	●	7	0.62	●	1132	56.23
19	らむ（らん）	●	6	0.53	●	299	14.85
29	たり（断定）	●	6	0.53	●	50	2.48
23	けむ（けん）	●	4	0.35	●	220	10.93
43	ごとくぢや	●	4	0.35	×	0	0.00
47	やうぢや	●	4	0.35	×	0	0.00
5	しむ	●	3	0.26	●	27	1.34
33	まほし	●	3	0.26	●	15	0.75
36	げな	●	3	0.26	×	0	0.00
45	さうぢや	●	3	0.26	×	0	0.00
8	り	●	2	0.18	●	336	16.69
24	なり（伝推）	●	1	0.09	●	54	2.68
18	まし	●	1	0.09	●	19	0.94
21	めり	●	1	0.09	●	4	0.20
17	ようず	●	1	0.09	×	0	0.00
15	むず（んず）	×	0	0.00	●	213	10.58
38	てんげり	×	0	0.00	●	71	3.53
39	たんなり	×	0	0.00	●	6	0.30
40	べかんなり	×	0	0.00	●	4	0.20
37	てんぎ	×	0	0.00	●	2	0.10
41	まじかんなり	×	0	0.00	●	1	0.05
使用度数合計			11338	1000.00		20131	1000.00
異なり語数合計			41語			37語	

備考　表の欄外の上部のⅰ，ⅱ，ⅲは並列の優先順位を示す。

使用度数が多い語として「た」が目立つ。度数2865、比率252.69‰は全体の四分の一を超える。「た」は〈天草版〉の助動詞を代表する語と言っても支障ないほどである。次に多いのが「らる」「る」「たり（完了）」「ぢや」「ず」「う」「うず」で、比率は50.00‰を超える。続いて、比率が5.00‰を超えるのが「す」「なり（断定）」「さす」「なんだ」「やうなり」「まじ」「まい」「らう」の８語である。他に、0.50‰を超えるのが「べし」から「たり」までの13語、それ未満が「けん」から「ようず」までの12語である。

四　〈天草版〉の助動詞の基幹語彙

日本語の語彙の研究における基本語彙・基幹語彙・基礎語彙の概念を、真田信二は従来の使用法から次のようにまとめている。[注3]

（１）基本語彙・・・ある目的の上にたって人為的に選定されるべき功利性をもった語集団。

（２）基幹語彙・・・ある特定語集団を対象としての語彙調査から直接得られる、その

〈天草版〉と〈高野本〉に共通して使用されているのは異なり語数にして31である。主たる意味によって分類すれば、①受身が2、②使役が3、③完了が4、④過去が2、⑤推量が7、⑥過去推量が1、⑦伝聞推定が1、⑧打消が1、⑨打消推量が2、⑩断定が2、⑪希望が2、⑫比況が1、⑮複合語が2である。

また〈天草版〉に見られるが〈高野本〉に存しないのは異なり語数にして10である。推量か断定の意味を有する語が多い。前者には「ようず」「らう」「まい」「げな」、後者には「ぢや」「ごとくぢや」「さうぢや」「やうぢや」「さうなり」がある。

反対に〈天草版〉に見られないが〈高野本〉に存するのは異なり語数にして6である。これらはすべて撥音を含み、〈高野本〉が平曲の譜本の系統の詞章であることと関連している。

三　〈天草版〉の助動詞の各語の使用度数

〔表Ⅰ〕に示した助動詞は〈天草版〉でどの程度用いられているか、各語の使用度数を記して多い順に整理すると次のようになる。なお、使用度数の右欄に記したのは助動詞全部に対する該当の語の比率（単位：‰）である。参考のため、〈高野本〉についても同じ項目を対照して示した。

〔表Ⅱ〕　〈天草版〉の助動詞の使用度数表　（〈高野本〉対照）

iii		i			ii		
番号	〈助動詞〉	〈天草版〉度数・比率			〈高野本〉度数・比率		
10	た	●	2865	252.69	●	5	0.25
2	らる	●	1504	132.65	●	774	38.45
1	る	●	1385	122.16	●	1702	84.55
9	たり（完了）	●	955	84.23	●	1893	94.03
31	ぢや	●	747	65.88	×	0	0.00
25	ず	●	703	62.00	●	2080	103.32
14	う	●	670	59.09	●	80	3.97
16	うず	●	589	51.95	●	8	0.40
3	す	●	514	45.33	●	762	37.85
30	なり（断定）	●	335	29.55	●	1912	94.98
4	さす	●	254	22.40	●	393	19.52
35	なんだ	●	151	13.32	×	0	0.00
46	やうなり	●	129	11.38	●	114	5.66
27	まじ	●	89	7.85	●	111	5.51
28	まい	●	84	7.41	×	0	0.00
20	らう	●	62	5.47	×	0	0.00
22	べし	●	51	4.50	●	1082	53.75
6	つ	●	49	4.32	●	244	12.12
32	たし	●	27	2.38	●	20	0.99
34	ごとし	●	26	2.29	●	115	5.71
11	き	●	24	2.12	●	1300	64.58
44	さうなり	●	19	1.68	×	0	0.00

(⑤)	(推量)	19	らむ（らん）	●	●
		21	めり	●	●
		22	べし	●	●
⑥	過去推量	23	けむ（けん）	●	●
⑦	伝聞推定	24	なり	●	●
⑧	打消	25	ず	●	●
⑨	打消推量	26	じ	●	●
		27	まじ	●	●
⑩	断定	29	たり	●	●
		30	なり	●	●
⑪	希望	32	たし	●	●
		33	まほし	●	●
⑫	比況	34	ごとし	●	●
⑮	複合語	42	ごとくなり	●	●
		46	やうなり	●	●
⑤	推量	17	ようず	●	×
		20	らう	●	×
⑨	打消推量	28	まい	●	×
⑩	断定	31	ぢや	●	×
⑬	打消過去	35	なんだ	●	×
⑭	様態推量	36	げな	●	×
⑮	複合語	43	ごとくぢや	●	×
		44	さうなり	●	×
		45	さうぢや	●	×
		47	やうぢや	●	×
⑤	推量	15	むず（んず）	×	●
⑮	複合語	37	てんぎ	×	●
		38	てんげり	×	●
		39	たんなり	×	●
		40	べかんなり	×	●
		41	まじかんなり	×	●
	異なり語数	合計		41	37

助動詞の語彙として〔表Ⅰ〕のように整理したが、注意しておく点もある。

（イ）　14〔う〕は長音節の後部要素であるが、一般の日本語表記にしたがった。15〔うず〕も同様に扱った。

（ロ）　37〔てんぎ〕は〈高野本〉の原本で「てき」（2例）「てしか」（2例）となっている。そして新日本古典文学大系『平家物語[文献10]』では後者を「てンしか」と校訂している。ここでは『平家物語総索引[文献1]』と同様に「てんぎ」「てんじか」と解した[注2]。

（ハ）　38（てんげり）は〈高野本〉で多数見られる。が、〈天草版〉では存しない。ただ「てげる（tegeru）」が1例見られる。〈天草版〉の口訳原拠に近い『平家物語』〈斯道本[文献8]〉には「忠清ハニゲノ馬ニソ乗リテゲル」とあり、これは「てんげり」と解せないこともない。

〈高野本〉〈高〉・・・・・『平家物語』〈高野本〉[文献7]
〈斯道本〉〈斯〉・・・・・『平家物語』〈斯道本〉[文献8]
〈駒大本29〉〈駒29〉・・・『平家物語』〈駒大本29〉[文献9]

二　助動詞の語彙の全体像

天草版『平家物語』は「扉・序・物語の本文・目録」の四部から成っている。このうちの物語の本文（3ページ～408ページ）に使用されている全部の語を集計すると、延べ語数90347になる。その内訳は自立語46883（518.92‰）、付属語43464（481.08‰）である。『平家物語』〈高野本〉に使用されている延べ語数は175691で、自立語が99126（564.21‰）、付属語が76565（435.79‰）である。〈高野本〉と比較すると、〈天草版〉の付属語の比率は増加している。

〈天草版〉の付属語のうち、助動詞の延べ語数は11338（125.49‰）である。〈高野本〉は20131（114.58‰）であるから、助動詞の比率も又〈天草版〉では増加している。が、1語あたりの使用度数は平均276.54で、〈高野本〉の544.08の半数強である。これは異なり語数が41で〈高野本〉の37と比較して大差はないことに起因していると言えよう。なお、『天草版平家物語語彙用例総索引』第4冊の解説Ⅱの＜表5＞は意味による細分をした語もあり、ここでの数値と異なる。〈注1〉

〈天草版〉に使用されている助動詞を主たる意味によって分類し、〈高野本〉と比較してみると、大略は次のようになる。

〔表Ⅰ〕　〈天草版〉〈高野本〉の助動詞の使用語彙対照表

分類番号	主たる意味	番号	〈助動詞〉	〈天草版〉	〈高野本〉
①	受身	1	る	●	●
		2	らる	●	●
②	使役	3	す	●	●
		4	さす	●	●
		5	しむ	●	●
③	完了	6	つ	●	●
		7	ぬ	●	●
		8	り	●	●
		9	たり	●	●
		10	た	●	●
④	過去	11	き	●	●
		12	けり	●	●
⑤	推量	13	む（ん）	●	●
		14	う	●	●
		16	うず	●	●
		18	まし	●	●

天草版『平家物語』における助動詞の基幹語彙について

――『平家物語』〈高野本〉との比較を中心にして ――

近　藤　政　美

一　はじめに

この研究の目的は、天草版『平家物語』の語彙を主として計量的な方面から考察し、室町時代の日本語の話し言葉の性格を解明しようとするものである。今回は特に「た」「ぢや」「う」などの助動詞の基幹語彙を中心に語彙表を作成し、文語体を基調にした『平家物語』〈高野本〉の助動詞と比較しつつ考察する。

室町時代にはキリスト教の伝道のため、ヨーロッパからイエズス会の宣教師たちが来日した。天草版『平家物語』は彼らが日本の言葉とイストリヤを学ぶためのテキストとして編纂された。『平家物語』を当時の話し言葉に訳し、問答体に構成しなおしている。内表紙には1592年（文禄元年）九州の天草学林で刊行とあり、また同年12月10日付けの不干ハビヤン識語の序文がある。が、現在では日本に伝存せず、大英図書館所蔵の『伊曽保物語』『金句集』との合冊本が確認されているのみで、内表紙の裏に３書を合わせた1593年２月23日付けの序文（総序）がある。

この書は日本語を、ポルトガル語式の写音法を基本にしたローマ字で綴っている。このことと話し言葉に訳したものであることが主たる理由で、当時の口語の語彙・語法・音韻などの研究のためにもっとも重要な資料として位置づけられている。

なお、従前『平家物語』および天草版『平家物語』の語彙の研究には『平家物語総索引』[文献1]『天草版平家物語総索引』[文献2]を用い、単語の基準を調整して計量的比較を行なった。が、今回は次の文献を作成した上で、研究を進めた。

a『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）[文献3]

b『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）[文献4]

c『天草版平家物語語彙用例総索引』[文献5]

また天草版『平家物語』からの引用は漢字平仮名交じりに直して示す。ローマ字綴りの原文は『天草版平家物語語彙用例総索引』〈影印・翻字篇〉を参照されたい。

『平家物語』諸本については次の略称を用いることもある。

〈天草版〉〈天〉・・・・・天草版『平家物語』[文献6]